

このサイトを作ったきっかけ

デニムの虜になったのは。。。

もともとこのサイトを作ったのはデニムが好きだったから。単純に好きって言うだけかな。でも単に好きって言うだけじゃなくなっちゃったかな。

デニムが好きって言ってもいろいろあると思う。単純にデニム生地だったら良くてだけの人もいれば、ヴィンテージこそがデニムだって言う人もいると思う。またパンツこそがデニムの代表だって言う人もいれば、ジャケットが好きって言う人もいると思う。

でもデニム好きの人はこだわりを持っている人が多い様な気がする。このこだわりは自分が分かれば良くて、他人に強要するものでもないし、無理矢理に理解してもらおうなんてものでもないと思う。だって十数万円のものが見る人によっては五十円でも要らないって言われたりするんだし。大切なのは自分が好きで、着用することに満足していればそれで結構だと思う。

誰かにこれを理解してもらおうとか、分かって欲しいとかって全く思わない。だって理解のしようがないんだし。ただ一つ言えるのは、理解しなくても良いから否定もして欲しくない。他人には理解出来ないいろんなことがある訳だ。それを自分が知らないことだからとか理解できないからって言って真っ向から否定するのは愚の骨頂だ。人はそれぞれ他人には理解出来ない何かを持っている。私には理解出来ない何かがあっても、『あーそうなんだー』って思う。だから理解できなくても『ふーん、そうなんだね』って程度に思ってもらえれば良い。だから私は誰にも強要しない。自分の考えを押し売らないし誇示しない。単純に好きなだけ。それが一番大切だし、楽しいと思う。

何を隠そう私自身がデニムを好きになってしばらくの間 "501XX" なんて言葉さえ知らなかった。501 は知ってたけどね。もともとデニムの何に魅力を感じたのだろう。それはまず今で言うGジャンと出会ったこと。中学生の頃だ。それまでもジーパンは穿いていた。いろいろな形が流行っていたので、いろいろ穿いた。その時も確かに好きだったけどデニム自体に魅力を感じていた訳ではない。そのGジャンは黒だった。ブラックデニム。洗って洗って、擦って擦って、独特な風合いを出していった。今考えれば大したことではない。でも不思議とハマった。その後Gジャンを購入してはいろいろと加工したり、ワッペンを付けたりしてた。加工は強烈なデザインにしたりした。もちろん私自身に縫製の技術はないのでアイデアを出しプロに依頼すると言うパターンでした。他の素材とを組み合わせたりと当時としては斬新でした。今となってはその後ブームの時にその様なものも出てきましたが。そしてそれはパンツにまで及んだ。とにかく何本も穿けなくした。勿体ないかも知れない。だけどその時に

惜しみなくいろいろとやったので現在のメーカ加工品のレベルが分かる。どれだけの事をやったのか、どれだけ手間をかけたのかが分かる。言っておきますがデニム関連で働いたことはありません。全て趣味でした。

そしてそんなGジャン好きが会ったのが "70505" だった。リーバイスはやはりキングだった。新品だと割高だった。古着だと綺麗な色落ちの物が同程度の価格で買える。今は高価になってしまったけど、当時は美しい縦落ちをした古着が簡単に手に入った。好きだから買ってしまふ。古着の色落ちはいろんな色合いを見せる。全て欲しいと思う。いろいろ物色しているとヘンテコリンなリーバイスのジャケットに出会う。格好悪いなと思った。初めて見たとき正直言って幼稚園児の着る、上からすっぽり被るあの服を連想してしまった。不思議なジャケットだなーって。それがファーストやセカンドだった。びっくりする価格だった。

そんな中 "XX" という言葉を知ってしまう。この独特の色落ちを知ってしまう。これにはかなわない。いろいろ見て回っていると "501XX" に当然出会う。本物のヴィンテージには "XX" という言葉が付くことを知る。そうして "70505" の親分はサードで "557XX" であるところを知ってしまう。"70505" の美しい縦落ちに比べると明らかに違っていた。その "557XX" の縦落ちはワイルドだった。そしてあの幼稚園児が着る服だと思ったジャケットたちは更にサードの親分でファースト、セカンドと二種類あることを知る。それからあのファースト、セカンドの色落ち、"XX" 特有の縦落ちに魅力を感じ始める様になる。やはり "506XX" "507XX" "557XX" そして王者 "501XX" の非常にワイルドな色落ちの虜になる。

国産レプリカブランドとリーバイスジャパン

1980年代後半頃からリーバイスジャパンも独自で復刻モデルを出していた。これが出来が悪かった。ま、珍しいからってだけの存在だった。

そんな中、特に1990年代に入って国産レプリカブランドの商品は出来が良かった。それは同じように "501XX" の虜になった人達が発起して作り始めたからだ。しかし残念なのはどんなに生地こだわっても、どんなに形を追求しても、どんなに縮率を研究しても、それは模倣品でしかありえなかった。それは LEVI'S の赤タブやボタン、リベット、そしてアーキュエイトステッチが使えないからだ。リーバイスが倒産して無くなってれば使えたかもしれないけどね。それは今でも言えること。どんなに素晴らしいレプリカをこの世に送り出しても、その源が "501XX" である以上、模倣品でしかない。しかし模倣品であっても現在 "501XX" と同じあの履き心地などが安価に手に入るのなら全く文句はない。賢明な選択肢だ。

基本的に方向性、生い立ちが違う

レプリカブランドでもリーバイスジャパンでも本家 US リーバイスでも言えることだが、根本的にオリジナル(ヴィンテージの当時のデニム)とは違う。それは、オリジナルは均一なデニムを目指したはず。これに対し、復刻は意図的にムラ系を作った。技術不足で出来たものと計算されたものや意図的に作ったものの違いがあるはず。これは単純には気持ちの問題かも知れない。しかし私はこの部分にもこだわる。どんなに素晴らしい色落ちを見せても意図的に程度を低く作ったものだと感じてしまう。だからと言って悪い訳でもないし否定する気も毛頭ない。ただ言えるのはどんなに最高の色落ちをしているパンツを穿いていても、オリジナルの 501XX に並べられたら『負けた!』そう思う。例えばそれが色は薄く、破れてボロボロになっていたとしてもだ。話は戻るが現在ではこのムラ系を作ること自体は難しいことではない様だ。今一番大切にされているのはシルエットや履き心地なんだと思う。

本国での再生産

見た人は少ないかもしれない。私自身 NHK なんて見ないんだけど、その昔 1995 年か 1996 年、それもかなりの深夜だったと思うが TV (NHK) をつけっ放しにしてたら、リーバイスの工場の製造風景が出てきて、ナレーションでこう言ってた『リーバイスが本格的に XX というデニムの再生産を開始しました。これは伝統のヴァレンシア工場で生産され、デニム生地はもとより各部のデザインも当時のものが忠実に再現され、トップボタンは、、、、』言葉は違うかもしれないがこの様なニュアンスだった。何の番組かは覚えていないが、これを見たオイラはビビったさ。すげえよっっ! って思ったさ。これが今の 1955 年モデルの 501XX に当たるね。でも 1996 年当時の生地と今現在売られている生地は明らかに違う。発売当初の方がライトオンスでオリジナルに近いと思う。はっきり言って 1996 年の発売当初のデニムが今でも好きだ。これでそれまでは子供だましなレプリカしかリーバイスブランドでは買えなかったが、このモデルの発売で国産レプリカブランドに負けない本気のレプリカがリーバイスブランドで買える様になった。これには当然赤タブ(材質違う様だけど)やアーキユエイト、パッチやボタン、リベットなどにリーバイスを主張できる。当然ではあるけど嬉しいことだった。もうこれ以上のレプリカは手に入らない。本家リーバイスが自ら本気で作ったレプリカだ。これは再生産モデルと呼んでも遜色ない。それ程の出来映えだった。

その後、本国で発売されていた "201XX"(後に 501XXc となる)や"551ZXX" "506XX" "507XX" "557XX" なども正規にリーバイスジャパンからも発売開始となる。この 5 モデルは全て入手しました。当時は異常なプレミアムで入手困難でしたが、とあるコネを当時持っておりなんとか全て入手出来ました。特にジャケットは全て国内正規初出荷モノです。この頃はこの再生産モデルの虜になっていました。

どちらが好き？

現在はこの再生産モデルとオリジナルのヴィンテージのどちらも着用します。

ジャケットに関してはオリジナルばかり着ていますが、パンツは再生産モデルを穿くことが圧倒的に多いです。

この再生産モデルに関して、モデル数も増えてきて、サイズ表記もばらばらで私自身サイズ選定で悩みました。この同じ悩みを少しでも減らせたらいいなと思います。

<NAME> KAZYA

<E-mail> webmaster@kazya-n.com

< URL > KAZYA's_ROOM

<http://www.kazya-n.com/>